

## ミンダナオ子ども図書館・漂流記

### 序

「この先のイスラム地域で戦争が起こり、大変なことになっているが、いっしょに行ってみますか？」

ある日、突然、泊めていただいていた司教館の二階の窓辺で、バリエス司教が興奮したように話し出した。

司教館の二階のガラス窓からは、庭に生えているラワンやマホガニの熱帯樹木の木陰から枝越しに、強い陽ざしが流れこんできて、質素な白いガウンに身をつつんだ司教の横顔を照らし出していた。

とつぜんの誘いに困惑気味のぼくに向かって、バリエス司教は、ふだんの穏やかで平和な雰囲気とは異なる厳しい表情で、興奮げみ言葉を続けた。

「フィリピン軍とアメリカ軍の合同演習による空爆もうけて、リグアサン湿原地帯にすんでいる大量のイスラム教徒たちが、ピキットの街周辺に避難してきている。

現地のカトリック教会は、ときには爆弾の落ちるなか、ライオン神父を中心に、イスラム難民の救済に奔走しているが、とても手が回らない状況だ。手伝いに行かなくてはいけない！」

ミンダナオでは、ときどき戦闘が起こることは聞いていた。

共産ゲリラと呼ばれるNPA（新人民軍）と国軍、イスラム反政府組織と政府軍の間に、四十年以上にわたって戦闘があり、そこにリドーと呼ばれる地域の有力者同士の小競り合いも加わって、そのたびに避難民が出る、という話も耳にはしていたが・・・。

これは後でわかったことだが、国連の調べでは、戦争や戦闘による避難民の累計が、当時世界で最も多いのがミンダナオだったのだ。しかし、そんなことはついぞ知らず、本物の武器を手についたり、身近に見たことすら無いほどの、平和な日本に生まれて育ったぼくには、戦争はたとえ小耳に挟んだとしても、まったく実感のないものだった。

「難民キャンプ」という言葉を聞いても全く想像が働かない。

キャンプというからには、避難民はテントに収容されているのだろう、というぐらいのイメージしか無かったのだから！

ガラス窓から明るいう陽ざしが転がりこんでくるだけの、平和としか言いようのない、司教館の二階の窓の外からは、小鳥たちのさえずりが聞こえてきた。

興奮気味に話すバリエス司教の言葉にも、ほとんど特別な反応をしめすこともなく、言われるままに準備すると、司教館の車に乗せてもらい、ぼくたちはイスラム地域ピキットに向かって出発した。

1、ミンダナオ子ども図書館を始めた直接的なきっかけ

ミンダナオ子ども図書館を始めた直接的なきっかけは、当時滞在していたキダパワンの司教館から、一時間半ほど西へ行ったイスラム地域、ピキットで大量の戦争避難民を見せつけられたからだった。

2000年の当事、この地域では、フィリピン軍とアメリカ軍とによる合同演習（現地ではバリカタンと呼ばれている）が行われていた。

バリエス司教に案内されて、はじめてピキットの難民キャンプを訪れた時には、ミンダナオに足を踏み入れるようになってから、一年ほどたっていたのだが、ぼくは合同演習のことすら知らなかった。

ミンダナオの子どもたちの事や、自然のなかで素朴な生活をしている漁民や先住民の暮らしには関心を持っていたものの、社会情勢には、とんと関心が無かった。テレビを見たり、新聞を読んだりする気になれなかったこともあるが・・・

「合同演習」という言葉を聞いても、日本にいた頃に想像していたのは、住民や市民に影響をおよぼさない、海や空や特定の陸といった地域で、模範的にドンパチやるていどの事だと思っていたが、とんでもない！

当時、ミンダナオで起こっていたことは、「演習とは名ばかりの、実戦」だったのだ。

迷彩服すがたの軍人たちが、鉄砲を胸に抱いて、濃緑の軍用車にすしづめになって国道をひた走り、ピキットの町の広場に集まると、そこを拠点にして、湿原や山岳地帯に乗りこんでいく。戦車が何台も、地煙たてて農道を突進していく。

遠くからは、砲撃音がドーン！、ドドーン！と聞こえてきて、森のおくからは、機関銃の音が、バラバラバラつと聞こえてくる。

当時、湿地帯や山岳地帯、時には都市近郊から国道沿いに、命がけで避難してきた難民の数は100万人。空爆や夜襲のときなど、逃げ遅れた家族の死体を埋める暇も無く河に流したという。

現地は、国際機関や停戦監視団でも容易に入れない高度な危険地域だったのだ。

今でこそミンダナオ子ども図書館は、スタッフもぼくも、連日のように現地に深く入りこんで活動をしているけれど、当時誘ってくださったバリエス司教は車の中で、外国人であるぼくたちに、「絶対に車から離れないこと」をくり返し約束させた。

しかし、現地に着くまでは、そんなことは想像する事も出来なかった。

2、コタバトにぬける国道は、ところどころ壊れているものの

コタバトにぬける国道は、ところどころ壊れて穴が空いているもののとりあえずコンクリートだ。

車は、ドリアンやランブータン、ランソネンスやマンゴステインといった熱帯果樹のしげる果樹園をぬけ、高原地帯から湿原地帯へと緩い傾斜を下っていった。

濃紺の熱帯樹木のうえには、強いながらもさわやかな光に満ちた熱帯の青空が広がっている。戦争など、想像できない平和な世界だ。

白樺のようなゴムの木の林を横目に、アポ山麓の高原地帯をくだっていくと平野が広がり、湿原地帯が近づくにつれて田んぼが目につき始める。収穫間近の黄色い稲穂の田んぼの隣に、田植えがされたばかりの苗田が広がる風景は独特だ。聞くと、こちらの田んぼは、二・五期作なのだ。

キダパワンとピキットの中間に位置するカバカンを超えると、教会が少なくなり、しだいにイスラム教徒の礼拝所であるモスクが目にとまるようになってきた。

ベールをかむった黒い礼服のイスラム女性が、どうろわきを、やはりベールをかむった少女たちの手を引いて歩いている。金曜日の礼拝が終わって家に帰るところだった。

バリエス司教が、車の助手席からふり返ると言った。

「このあたりは、ARMMといってイスラム自治区。もうじきミンダナオ最大の母なる河、プランギ河を渡りますよ。ピキットはもうすぐだ。」

車は、国道ぞいに建つ大きなモスクを横切ってカーブすると、とつぜん目の前が広がり、大きな河が現れた。さすがに、母なる河と呼ばれているだけあって、実に悠々たる大河だ！

ぼくたちを乗せた車は、河にかかる橋を渡りはじめた。

上流は右手で、大蛇のように湾曲して流れる茶色の水流の向こうには、濃緑の丘陵地帯が広がっている。そのさらにはるか遠くには、霞んだような青い山並み。

バリエス司教の話では、山並みは、アポ山にまで広がっているという。

アポ山は、フィリピンの最高峰で、2954メートルの高山。周辺には、熱帯雨林であるジャングルが残っていて、先住民とくにマノボ族が多く住んでいるという。そこに降る雨は、多くの支流を集めて高山地帯をかけくんだり、濁流となって高原地帯をぬけ、大河プランギに注ぎこみ、そのゆくさきで巨大な湿原を形成している。

後にミンダナオ子ども図書館が設立されると、湿原のイスラム教徒の子どもたちに加えて、アポ山周辺の貧しい先住民族の子どもたちが奨学生となつて、読み語りや医療、難民救済活動にたずさわることになるのだが、もちろん当時は、そんなことはまったく考えてもいなかった。

「ボランティア活動」など、いかにも偽善的な自己満足で、うさんくさい！

若い頃から、NGOを立ち上げようとも、慈善活動をしよう

すら、思ったことも無かった。

3、車は、プランギ河にかかる橋のうえで速度をおとした。

車は、プランギ河にかかる橋のうえで速度をおとした。

橋から左手の下流を見ると、右手と異なつて、視界に山並みは無く、森林も無く、ただひたすら広大な緑地帯のなかに、とうとうと大河が流れこんでいくのだった。

この先が、リグアサン湿原か！

リグアサン湿原は、東南アジア最大の湿原と言われているようにだけでも、とにかく広い。橋から見渡すと、天気の良い日にだけ、はるか彼方の地平線に、青白く山々がかすんで見える。それが対岸だから、その広大さは推して知るべし、気が遠くなような気持ちにさせる。

しかも、湿原は驚くほど自然が豊かで、巨大な鯉や雷魚やナマズをはじめとする淡水魚が住んでいて、数千人の漁民が生活しているという。

いるのは魚ばかりでは無い。多くの野生動物も生息していて、とりわけワニは、信じられないほど大きく、ギネスブックに登録されている世界最大のワニは、8メートルもありミンダナオ生まれだ。

野鳥も豊富で、国鳥の白頭鷲をはじめカワセミなどいて、漁舟に乗って中に入ると、数万年前から変わることの無い自然が感じられ、自然愛好家には涎垂ものの地域だ。

なかにはたくさんの集落が散在しており、人々は、木づくりの小舟で移動してはいるものの、イスラム反政府勢力の拠点でも有り、現地の人々でもおいそれと足を踏み入れることが出来る場所ではない。

それ故に、自然が保護されてきたとも言えるのだが、外国人にいたっては、足を踏み入れることの出来ない未踏の危険地帯となっている。

マニラに住む人々は、ミンダナオを恐れているが、ミンダナオに住む人々にとっても、ここは最も恐ろしい地域のひとつで、そ

の後この地で活動するようになってからも、現地を知る人々から、しばしば忠告を受けた。

「国道沿いならまだしも、湿原沿いの地域やARMと呼ばれるイスラム自治区には、入らない方が良い。」

「特に、舟で湿原地帯にだけは入らないように。誘拐されて連れ去られても、探し出す手段がないからね。」

10年後の今でこそ、ミンダナオ子ども図書館は、自分たちの木舟をもち、NGOとしてはおそらく唯一、この湿原の内部でも継続的に活動し、舟でしか行けない集落に保育所を建設したり、奨学生をとったり、医療で患者を運んだりしているが・・・。

どうしてそのようなことが可能になったのかを、これからゆつくりと話していこう。

4、プランギ河を渡ったとたん、風景は一転した。

ミンダナオの母なる大河、プランギを渡ったとたん、風景は一転した。

「なんだこれは？」

今まで続いてきた、平和な田園風景のあちらこちらに、避難生活をしている難民たちの姿が現れたのだ。

ピキットに向かって走る車の両側、国道沿いのわずかな空き地に、着の身着のままの姿で生活をしている。それは、避難小屋などとはとも呼べないようなしろものだった。

1畳か、良くて3畳半ぐらいのスペースにござを引き、どこからか採って来たかわからない木の枝を四方に立てて柱にして、そのうえに青いビニールシートを被せて屋根がわりにしている。

ビニールシートを買うことが出来る家族は良い方で、多くの家族が、ヤシの葉を重ねておいた下で生活している。

車でピキットに向かうにつれて、その数は瞬く間に増えだした。少し小高い国道を走りながら見わたすと、道沿いだけではなく、両側の牧草地のような農地にも避難民の仮小屋は広がっている。しかもその数が半端ではない。見渡す限り地平線まで避難民なのだ。

「難民キャンプ」というのは、キャンプという言葉から想像していたように、戦争で避難してきた人々を、特定の空き地なりにテントをはって収容する施設であり、そこにいけば、医療や食料も用意されている場所であると思いこんでいただけに、初めて見る避難者の状況に強ショックを受けた。

確かに、場所によっては、特定の空き地などに集められてはいるものの、そのほとんどは、国道沿いどころか農地から川沿いにいたるあらゆる場所に、雨よけのシートを張って生活しているのだ。

後にわかったことだが、2000年にエストラダ大統領のもと、フィリピン軍とアメリカ軍の合同演習（バリカタン）があった。しかし、演習というのは名ばかりで、事実上の実戦が起こり、100万人以上の人々が避難民となった。ぼくが、この地に連れて行かれたのは2001年の初めのころの事だから、このときの避難民を見たことになる。

5、さすがにショックだった。

車は、ピキットの市内に入る手前のパガルガン・ピキットで止まった。

「ここはARMMといって、フィリピン政府から半ば独立したイスラム自治区です。あの白い建物が役所。でも、一般の州とちがって、警察や軍の管理下に入りにくい地域なので気をつけてください。絶対にわたしたちから離れないように。身代金目的の誘拐が起こっても、少しもおかしくはない場所ですから。」

バリエス司教は、そう言うのと、車から下りた。

後ろの荷台から、数人のおつきの者たちが飛び降りて、すぐに司教の周囲を囲んだ。ぼくたちも、車から下りると、その仲間に加わった。

目の前には、一階建ての白い役所の建物が見える。しかし、役所のまわりにはこれといった家もなく、店もなく、町といった感じはまったくない。

それどころか、役所の庭にも、広場の大木の下にも、穴だらけ

の国道沿いにも、どこにもかしこにも青いビニールシートがはられ、避難民たちが、シートの下にしゃがみこんだつきりポーズをしている。

そのころぼくは、ミンダナオの歴史については何も知らず、司教が言ったイスラム自治区（ARMM）が、モロ民族解放戦線（MNLF）の30年にわたる独立闘争のすえに、1990年に成立した、イスラム教徒による自治区であることも知らなかった。

自治区というのは、政府が特別にモロ民族解放戦線の自治にゆだねた場所のことだ。それだけに、ぼくが誘拐されたとしても、フィリピン政府の手が入りきらない可能性の高い地域なのだ。

司教はさらに言葉をつづけた。

「さっき、大きな河をわたりましたね。この先にも河がある。

この町の左手奥にはリグアサン大湿原が広がっているんです。もしここで誘拐されて、手足を縛られたまま目隠しされて、小舟に乘せられ、反政府ゲリラのいる島に運ばれても、誰も救い出すことができない。湿原地帯は、ゲリラたちの拠点なのです。」

ぼくは、フィリピンに来る前まで、ミンダナオ島に、イスラム教徒がいることすら知らなかった。そんなぼくが、今日の前にしている戦争避難民の置かれている状況を目の当たりにして、「その原因が何か」を理解しようにもできなかった。

日本の世界史の教科書は、フィリピンには、300年前にスペイン人が入植し、キリスト教がもたらされ、アジアでは珍しいカトリックの国であることは書かれていても、それよりもさらに100年前に、すでにミンダナオにはイスラム教が布教され、フィリピンでは初めての王朝が出来ていたことなど知る由もない。

役所の方から、小太りの女性が近づいてきた。案内をしてくださるソーシャルワーカーだという。

その女性の後について、ぼくらは、難民キャンプと呼ばれているこの一帯を歩き始めた。

歩きながらまわりを見ると、疲れ果てたような女の人、そして子どもとお年寄りがほとんどだ。なかにはシートの下から出て木陰で話をしている人もいるが、午後の炎天下のせいか、ほとんどの人がシートの下にこもっている。

「男の人たちは、どうしているんですか。」

ぼくが、同行者の女性にたずねると、小太りで母親らしい女性は、こう答えた。

「そうですね。土地があるひとは、危険をおかして自分の畑にもどって、植えた野菜が少しでも残っていないか、探しにいつているかもしれないけれど・・・」

しばらく沈黙したあと、彼女は、少し言葉を濁すように言った。

「多くの男性たちは、戦っているのです。」

「えっ。」

イスラムの男性たちは、普段は漁民や農民たちなのだが、戦争がおこると、妻子を難民キャンプに残して、戦場におもむくというのだ。確かに、ここに残っているのは、女性と子どもたち。男といえど、老人か少年たちで、日本の中高生にあたる若者たちもほとんど見かけることはなかった。

彼らが、戦っているとしたならば、正規軍ではないはずだから・・・。

たしかに、周辺の山々からは、散発的に大砲の音がドドーン、ドドーンと聞こえてくる。

子どもたちも、大人たちも、そうした砲声には慣れきっているのか、避難シートに座ったまま、大砲の音がしても、特別な反応をしめすこともなくぼんやりとしている。

バリエス司教は、案内の女性にたずねた。

「ピキット教会のライソン神父は、どうしていますか？」

女性は、三つ又に編んで後ろにゆわえた髪を、左手でたくし上げながら言った。

「いま、教会仲間で、市のソーシャルワーカーでもあるグレイスさんといっしょに、戦闘地のなかを駆け回っていますよ。残された子どもや女性を助けるために！」

「残された子どもや女性って！なぜ難民キャンプに収容しないんですか？」

おつきの者が、驚いてたずねた。

「一部の村は、反政府ゲリラよりだという理由で、町の難民キャンプにも入れさせないのです。」

「それは、ひどい！」

「それで、教会の神父や教会員が、命がけで救済に向かっているというんですね。」

「ええ、そうです。時には、爆弾の落ちるなかを！」

ぼくには、驚くべき話だった。

ミンダナオでは、クリスチャンとイスラム教徒は、てっきり反目しているのだと思っていた。

ぼくは、その女性にたずねた。

「つまり、カトリックの信者が、反政府組織と呼ばれているイスラムの人々を、命がけで救済しているというのですか？」

「そうです。隣人を放っておけないでしょう。」

「今、起こっているのは、宗教戦争ではないのですね。」

困惑したような顔をしている女性を見て、バリエス司教が言った。

「現地では、クリスチャンもイスラム教徒も、比較的仲良くやっているんですよ。特に、ここからコタバトにいたるイスラム地域で、戦前から長く活動してきたオブレート会はね。」

案内の女性が言葉を継いだ。

「第二次世界大戦中に、日本軍がここに攻めてきたときに、イスラムの人々をかくまって助けたのも、オブレート会の神父たちだったんです。」

隣のピキットの街中には、日本軍が駐留していたスペイン時代の要塞跡がありますよ。地下にはいくつもの防空壕があつて、遺骨や遺品が残っているようだけれども、何しろここが、危険地域なので、いまだに日本政府も調査団を派遣できないのです。

まさにここが、日本軍と米軍の激戦地で、いまだに湿原地帯には、当時逃げた日本兵の末裔がいますよ。イスラム教徒になっていますがね……」

ぼくの父方の叔父も、ミンダナオではないけれども、レイテ島で戦死している。海軍の医師で、スペイン語もたんのうで踊りもうまく、ずいぶん現地でモテたらしい。遺体も何も見つからない。

これは、後になって、ぼくたちが現地で活動し始めて、起こっ

たことだけでも、病気を治してあげたイスラム教徒の子どものお父さんが、ぼくの耳元で、「自分の祖父は日本兵だった」と語ってくれたことがあった。

同様のことは、山岳地域に住む先住民のマノボ族の人々からもしばしば聞いた。